梅花女子大学文化表現学部紀要:学術論文, 20:86-101

古代浦島説話における「玉手箱」開箱と韓朋譚
―中国尉犁（イリ）県出土「韓朋賦」断簡・ベトナム瑶（ヤオ）族民間古籍『韓朋伝』に見える開箱の記述との比較考察―

The Opening of the Tamatebako in the ancient *Urashima* fables and the *Tale of Han Peng*(韓朋):
Comparison with the description of the opening the box found in the fragment of *Han Peng Fu*（韓朋賦）excavated from Yili County, China and *Han Peng Den*（韓朋伝）, an ancient folk tale of the Vietnamese Yao tribe

三　木　雅　博
MIKI Masahiro

【要旨】

『丹後国風土記』逸文や『万葉集』『浦島子伝』『続浦島子伝』など、多くの古代文献に記された浦島説話については、民俗学、伝承文学、日中比較文学などさまざまな方面からのアプローチがなされているが、特に中国の劉阮天台説話とは、異界訪問、異界での仙女との結婚、主人公が人間界に帰還すると何世代もの時間が経過している、など説話の主要なプロットが類似しており、両者の関係の深さは古くから指摘されてきた。

しかし浦島説話には劉阮天台説話には見えない重要なプロットが一つだけ存在する。それが仙女が別れに臨んで主人公に手渡す玉手箱（玉匣・玉篋）の禁忌の話である。この玉手箱の禁忌の話についても各方面からの言及がなされているが、ほとんどは浦島説話が記された文献からの考察であり、中国の類話として報告された文献も、「箱を開けてはならない」という禁忌が記されていなかったり、禁忌の内容や結末が異なっていたりするなど、浦島説話を記した各文献と逐一比較検討するのに堪えるだけの類似性を持った中国の文献は存在していなかったといってよい。

ところが今般、金文京氏は中国尉犁県出土の唐代のものと推定される「韓朋賦」断簡に、敦煌変文の「韓朋賦」には見えない「再会を望むならこの箱を絶対に開けてはならない」という禁忌が破られ箱が開けられたために再会が叶わなくなる話柄が記されていること、そしてこの話柄はベトナム瑶族に伝わる「韓朋伝」にも見えることを報告された。ここにおいて浦島説話の玉手箱の禁忌の話は、初めて自らの〈外〉に唐代まで遡れる比較考察の対象を得たことになる。本稿では金文京氏の報告に導かれながら、古代の文献資料に記された浦島説話に見える玉手箱の開箱に関する記述と、尉犁県出土「韓朋賦」断簡やベトナム瑶族の民間古籍「韓朋伝」における開箱に関する記述との比較を行い、古代浦島説話における玉手箱の開箱の記述についての私見を述べたい。

はじめに

『丹後国風土記』逸文や『万葉集』『浦島子伝』『続浦島子伝』など、多くの古代文献に記された浦島説話については、民俗学、伝承文学、日中比較文学などさまざまな方面からのアプローチがなされてい

るが、特に中国の劉阮天台説話[1]とは、異界訪問、異界で仙女と結婚生活を送る、主人公が人間界に戻ると何世代もの時間が経過している、など説話の主要なプロットが一致しており、両者の関係の深さは古くから指摘されてきた[2]。

しかし浦島説話には劉阮天台説話には見えないプロットが一つだけ存在する。それが仙女が別れに臨んで主人公に手渡す玉手箱（古代の文献資料では玉匣・玉篋などと記される）の禁忌の話である。この玉手箱の禁忌の話についてもこれまで各方面からの言及がなされているが、ほとんどは浦島説話が記された文献資料から考察されたものである。中国の類話を指摘した先学の研究としては、出石誠彦氏[3]が指摘された『捜神後記』の「剡県赤城」、西野貞治氏[4]が指摘された敦煌変文の「董永変文」の例が挙げられるが、前者は「劉阮天台」型の話で剡県の二人の男が深山で仙女と邂合し、別れに臨んで男の一人が仙女から「開けてはならない」と嚢を渡され無事帰郷するが、家人が嚢を開けると中から青鳥が飛び出し、暫くして男は田んぼに皮だけ残していなくなっていたというもの、後者は天女と董永との子である董仲が、卜者の孫賓に教えられて母の天女を天界まで訪ねて行き、母に会って金瓶をもらって下界に戻るが、孫賓が瓶の蓋を開けると中から火が出て孫賓が持っていた天界のことを記した書物をすべて焼いてしまい、天界のことがわからなくなってしまうというもので、後者には「（瓶の蓋を）開けてはならない」という禁忌自体がなく、前者は後者よりも話の運びは浦島説話に近いが、渡されるものは「箱」ではなく「嚢」であり、何より「決して開けるな」という戒めの前提としての「私と再会したいなら」という条件が記されていないため、結末も再会が叶わない悲劇としてではなく、一種の怪異譚として語られる。こうして見ると、浦島説話を記した各資料と逐一比較検討するのに堪えるだけの類似性を持った中国側の資料の存在は、これまで報告されていなかったといえよう。

ところが今般、金文京氏が 2022 年度の和漢比較文学会大会において、中国尉犁（イリ）県出土の盛唐の頃のものと推定される「韓朋賦」の断簡に、敦煌変文の「韓朋賦」には見えない、女主人公が「再会を望むならこの〈箱〉を絶対に開けてはならない」と戒めて相手に箱を渡すが、相手が禁忌を破り箱を開けたために再会が叶わなくなる、という話柄が記されていること、さらにこの話柄はベトナム瑶（ヤオ）族に伝わる「韓朋伝」にも見えることを報告された[5]。ここにおいて、浦島説話の玉手箱の禁忌の話は初めて自らの〈外〉に唐代まで遡れる比較考察の対象を得たことになる。

本稿では、金文京氏の報告に導かれながら、文献資料に記された古代浦島説話に見える玉手箱の開箱に関する記述と、尉犁県出土「韓朋賦」断簡やベトナム瑶族の民間古籍「韓朋伝」における開箱に関する記述との比較を行い、古代浦島説話における玉手箱の開箱の記述についての私見を述べたい。

なお本稿の目的は、古代浦島説話における玉手箱の話柄の〈出処〉として前述の韓朋譚の開箱に関する記述を位置づけることにあるのではなく、韓朋譚の開箱に関する記述との比較を通して古代浦島説話

---

1 漢代、劉晨・元肇の二人が天台山で道に迷い、渓辺で二女に逢い、歓待を受けて半年間共に暮らした後に帰郷してみると、そこには昔日の面影はなくただ七世の孫に逢ったという話。原話は宋・劉義慶撰『幽明録』、梁・呉均撰『俗斉諧記』所載であるがともに原書は失われ、『法苑珠林』巻 31 潜遁篇、『芸文類聚』山部上・天台山類に「幽明録曰」、『蒙求』「劉元天台」、『世俗諺文』「七世孫」に「俗斉諧記曰」として引かれる。

2 既に平安中期の源為憲撰『世俗諺文』に「七世ノ孫、本朝浦島同事也」と記され、江戸時代には契沖が『万葉代匠記』巻四において高橋虫麻呂の浦島を詠んだ長歌の注に『幽明録』の記事を引くなど、近世以前から注意されていた。近時においては項青氏「平安時代における劉阮天台説話の受容と風土記系「浦島子」伝」（『国語国文学研究』〈熊本大学国語国文学会〉32 号、1997 年 2 月）に詳しい考察がある。

3 同氏『支那神話伝説の研究』（中央公論社、1943 年初版、1973 年増補改訂版）所収「浦島の説話とその類例」。

4 同氏「浦島の歌に見える玉篋のタブー発想について」（『萬葉』〈萬葉学会〉16 号、1955 年 7 月）。

5 金文京氏の報告は研究発表「幸徳秋水『鳥語傳』について」（和漢比較文学会第 41 回大会、2022 年 9 月 25 日）に添えて「（付録）新発見「韓朋賦」「遊仙窟」唐代写本について」としてなされたものである。

における玉手箱の開箱の記述を考察することにある。このことを最初にお断りしておく。

１．尉犁県出土「韓朋賦」断簡ならびにベトナム瑶族民間古籍「韓朋伝」に見える「開箱」の記述

1-1.金文京氏の報告にもとづく尉犁県出土「韓朋賦」断簡の紹介

まず、注５の金氏の報告にもとづいて、尉犁県出土「韓朋賦」断簡（以下「尉犁断簡」と称する」）について紹介しておきたい。同断簡は中国新疆ウイグル自治区の尉犂県にある克亜克庫都克烽燧遺跡から出土したもので、中国の考古学雑誌『考古』2021 年８月号に掲載された「新疆維吾爾自治区文物考古研究所「新疆尉犂県克亜克庫都克唐代烽燧遺址」」によると、同遺跡から盛唐時期の紙文書と木簡 861 件が発見され、中に「韓朋賦」、『遊仙窟』、『孝経』、『千字文』および「冬景既終、春光已逼」で始まる書簡などの残片があったことが記されている。金氏は注５の報告資料において「尉犁断簡」について、次のように記される。

「韓朋賦」１紙６行、□は破損字、〔〕内は推定字、〈〉は補った字。原文に句読なし、句読は『考古』翻字を私に若干改める。

１□□□箧看，若其不開，新婦有皈。語未盡，出門

２便拜〔使〕，ゝ者連把，接待上車，疾如風雨。朋母於是，

３呼天喚地，貞夫曰：「呼天何益，踏地何晩。四〔駟〕馬一去，

４何時可返」。 朋母新婦去後，乃開箧看。艶色

５光影，忽然喚〔煥？〕出。飛及貞夫，此光明到〈宋〉国。

６ □…… □集會諸臣，入 （下欠）

紙背に薄墨で2行27字、下記がある。

馬賓、閭元節、辛崇福、張思訓

□正月廿七日 掩耳□□先天三年 正月

＊先天２年（713）12月に開元に改元。改元の消息がまだ伝わらず先天３年となったので、実際には開元２年（714）。

＊「掩耳」は当地の地名。

＊この文は『敦煌変文集』「韓朋賦」138～139頁に相当するが、敦煌変文には、箧を開けなければ帰って来ると貞夫が言ったにもかかわらず、母が箧を開け、中から光が貞夫のところに飛ぶという話は無い。敦煌変文は下記、下線部は尉犂本と一致。

上堂拝客，使者扶譽（轝）。貞夫上車，疾如風雨。朋母於後，呼天喚地。嚎啕大哭，鄰里驚聚。貞夫曰：「呼天何益，喚地何免。駟馬一去，何得歸返？」梁伯迅速，日日漸遠。初至宋國，九千餘里。光照宮中。…諸臣聚集，王得好婦。 （破線は筆者による）

1-2.「尉犁断簡」とベトナム瑶族「韓朋伝」との関連についての金氏の指摘

さらに、金氏は敦煌変文の「韓朋賦」に見えない「尉犁断簡」の「開箱の禁忌」の話が、ベトナムの瑶族（中国の湖南省、広西壮族自治区、雲南、貴州省およびベトナム、ラオス、タイなどの山岳地に住む少数民族）の古伝承を記した書籍中の「韓朋伝」にも見えることを指摘し、

（韓朋の母が）箱を開いたため、妻が美貌になった話は下記のベトナム瑶族文献の下線部分に見え、尉

犂本と一致する。ベトナム瑶族写本（漢字）は 20 世紀のものと考えられる。

と記し、鄭美惠氏「《越南瑶族民間古籍・韓朋古》之故事特色與價値」（神奈川大学瑶族文化研究所編『瑶族文化研究所通訊』8 号、2021 年 7 月）[6]所収の、鄭氏が作成された瑶族伝来の韓朋譚の梗概を引用される。

到了三月清明節，韓朋随皇帝去遊春，聞談間皇帝得知韓朋家有美妻 。於是，重金懸賞命人去路韓朋婦奪來。其中只有張師請旨願去韓朋家。張師到韓朋家，告知盧三娘韓朋思念他，要她輿他一同前往。盧三娘卻在前一夜作夢。夢中預告不祥，因此，她婉拒張師的請求。不料張師卻威脅盧三娘，如不加以配合，便要以盧三娘有外情之由向韓朋告状。盧三娘憤怒之下，只好向韓朋老母親告別。臨行前還囑附老母親，她將容顔藏在金箱裡，千萬不要打開。没想到，老母親在三娘離去三五日後，因為思念而開了箱，容顔便「飛随三娘去」，「三娘美貌似花新」

（筆者注：文中の「盧三娘」は瑶族の「韓朋伝」における韓朋の妻の名前。敦煌本では「貞夫」）

この下線部について、金氏は越南老街省文化体育旅遊庁編『越南瑶族民間古籍（一）』（民族出版社、北京、2011 年）所収の「韓朋伝」の該当箇所を引かれて次のように記される。

「韓朋傳」の関連部分（267 頁） ― 七言句の説唱体。妻の三娘が夫の母と別れる時、「顔容」を箱に収め、母に開いてはいけないと言ったが、母が開いたため、「顔容」が三娘のところに行った。

當時拜別親老母，老娘在後好安身。
顔容藏在金廂（箱）里，我娘千萬莫開廂（箱）。
三娘去得三五日，淒ゝ想婦又開廂（箱）。
正是三娘船過水，水底現出好顔容。
落陽江水清如鏡，現出顔容十分新。
三娘便知娘開櫃，放出容顔走隨娘。
三娘肚里暗傷慟，眼中流淚落分（紛）ゝ

さらに金氏は、開箱の禁忌の話がある「尉犁断簡」ならびに瑶族写本「韓朋伝」（以下「瑶族韓朋伝」と称する）と敦煌変文「韓朋賦」との関係について、「これらの前後関係は、にわかには判定できないが、敦煌本のようなテキストをもとに箱の話を創作するのは困難と思え、敦煌本が箱の話を削除した可能性の方が高いように思われる」旨の見通しを語られた。

この両者の前後関係については、金氏とは別に「尉犁断簡」と敦煌変文「韓朋賦」との関係に注目した朱利華氏[7]も、断簡の「艶色光影忽然喚出、飛及貞夫。此光明到宋国（闕文）集解諸臣」の「此光明到宋国」が敦煌変文の「九千餘里、光照宮中」に呼応し、「集会諸臣」が「宋王怪之、即召群臣並及太史（略）諸臣聚集、王得好婦」と呼応していることから、「尉犁断簡」の開箱の禁忌の話はもともと「韓朋賦」に記され流布していたもので、それが偶々「尉犁断簡」に遺された可能性を指摘している（ただし、朱氏は「瑶族韓朋伝」には言及していないので、「瑶族韓朋伝」の存在を考慮すれば、開箱の禁忌の話が「韓朋賦」にもともと存在した可能性はさらに高くなる[8]）。

---

6 https://yaoken.sakura.ne.jp/data-room/data/TsujinNo8.pdf より閲覧可。

7 朱利華氏「考古新発現見証韓朋故事的漢唐流変」（『中国社会科学報』2021 年 9 月 30 日第 2261 期）http://sscp.cssn.cn/xkpd/bowu/202109/t20210930_5364278.html

8 中国西方の新疆で発見された唐代の「尉犁断簡」と、はるか南方のベトナムの近代写本「瑶族韓朋伝」に同趣の話が存在する問題に関しては、金文京氏が敦煌変文の「舜子変」と広西壮族自治区の壮族が伝える師公戯（仮面による宗教劇）「舜児」の内容が一致するという例を報告されており、金氏は唐代における北方から南方への人的移動、特に軍隊の派遣により軍中の芸人が伝えたのではないかと推測しておられる（「敦煌本『舜子至孝変文』と広西壮族師公戯『舜児』」、慶應義塾大学『言語文化研究所紀要』26 号、1994 年）。

1-3.「尉犁断簡」と「瑶族韓朋伝」における開箱の記述の考察

今ここで古代浦島説話との比較のために、改めて「尉犁断簡」と「瑶族韓朋伝」の両者に記された開箱の記述を、ａ．韓朋の妻（以下「妻」）が韓朋の母（以下「母」）に箱を渡して開けるなと戒める場面、ｂ．妻の戒めに背き母が箱を開いてしまう場面、ｃ．母が箱を開いた時に起こった事態とその後の展開、の三つに分けて考察してみよう。

ａ．妻が母に箱を渡して開けるなと戒める場面

（妻を宮廷に迎えるために宋王の使者が韓朋の家にやってきて慌ただしく妻を連れて行こうとする。妻は共に暮らしていた母との別離に臨み母に箱を手渡す）

「尉犁断簡」（字体を日本の通行字体に改めた。以下同）

□□□篋看、若其不開、新婦有帰。語未尽、出門便拝使。使者連把、接待上車、疾如風雨。

「･･･篋を看（み）て（or篋を看（まも）り）･･･、もし（篋を）開かなかったなら、新婦（私）は帰ることも有りましょう」。その言葉も終わらないうちに、（妻は）門を出て使者に拝謁する。使者は妻を引き連れていき、接待して車に乗せる、その素早（すばや）さは暴風雨のようである。

「瑶族韓朋伝」（字体については同前）

当時拝別親老母。　老娘在後好安身。

顔容蔵在金箱[9]里。　我娘千万莫開箱。

時に（妻は）老母を拝し別れを告げる。「お母様これからもどうかお元気で」。

（妻は）容貌を金の箱の中に隠す。（そして母に言う）「お母様絶対に箱を開けてはなりません」。

「尉犁断簡」は残念ながら母に篋を渡すまでの記述が欠落しており、母に「箱を開かなければ私は帰ってくる」と告げるところから始まっている。「瑶族韓朋伝」で注目すべきは「顔容」を金の箱に「蔵（＝隠す・しまう）」と記されていることで、妻は宋王が自分の美貌を伝え聞いて召喚しに来たことを悟り、自らの美貌を金の箱の中に封じ込めたと解される。「顔容蔵在金箱里」と短い七言句に縮約されているため、どのように容貌を箱に封じ込めたのかは具体的には描写されていないが、何も無い箱の中に〈容貌〉という抽象的なものを封じ込めるという行動を思い描くことは非常に難しい。常識的に想像すれば、ここはおそらく鏡に自分の容貌を映し（＝移し）、その鏡を金箱にしまっておくことで自らの美貌をそこに封じ込める、という行動を思い浮かべてみるのが適当なのではないか。「金箱」であることは、それが鏡をはじめとする女性の化粧道具を入れる大切な箱であることの傍証となり得るのではないか。またｃの開箱の場面で「尉犁断簡」が、箱から「艶色光影」が飛び出したと記すのも、箱に封じ込められたのが鏡であることを意識した記述であるかもしれない。

ｂ．妻の戒めに背き母が箱を開いてしまう場面

「尉犁断簡」

朋母新婦去後、乃開篋看。

韓朋の母は新婦（妻）が行ってしまった後、篋を開けて中を見た。

「瑶族韓朋伝」

三娘去得三五日。淒々想婦又開箱。

三娘（妻）が去って半月が経った。（母は）さびしくていたたまれなくなり婦（妻）を想って箱を開けた。

「尉犁断簡」では理由や状況も示されず簡単に「篋を開けた」と書かれているだけであるが、「瑶族韓

9 原文は「廂」であるが、金氏の指摘に従い音通の「箱」に改める。以下同。

朋伝」では、日が経つにつれてさびしさが募り妻のことを想って箱を開けてしまった、と開箱に至る経緯が記されており、浦島説話の地上に戻った後の浦島子の様子と通じる点で興味深い。

ｃ．母が箱を開いた時に起こった事態とその後の展開

「尉犁断簡」

艶色光影、忽然煥[10]出、飛及貞夫。此光明到宋国。（欠）□集会諸臣。入（以下欠）

あでやかな光が突然箱から輝き放たれ、貞夫（妻）の元へと飛んでいった。その光は宋国に到った。（欠）「集会諸臣。入」（以下欠）

「瑶族韓朋伝」

（母が箱を開いたときの様子は特に記されない）

正是三娘船過水、水底現出好顔容。落陽江水清如鏡、現出顔容十分新。三娘便知娘開櫃、放出容顔走随娘。

ちょうど三娘（妻）が船で川を渡っていたとき、水底に美しい顔容（かおかたち）が出現した。落陽江の水は澄んでいて鏡のようで、そこに現れた顔容はとても清新であった。そこで三娘は、母が箱を開けたので、放出された容貌がやってきて自分に随った（＝箱に閉じ込めておいた自分の美貌が戻ってきてしまった）ことを知った。

「尉犁断簡」では、「艶色光影」が飛び出して妻の元へ飛んでいったとあり、次に「此光明到宋国」とあるところから、箱から飛び出した光は、宋国に連れて行かれた妻の所へ飛んでいったことがわかる。「瑶族韓朋伝」には、箱の中身が飛び出す場面そのものは記されていないが、宋王の元に連れて行かれる妻が船で川を渡るときに、水に映った自分の美しい容貌を見て、母が箱を開けたので放出された容貌が自分の所に戻ってきてしまったことを知ったと記す。両者の記述を照合してみると、「尉犁断簡」で箱から飛び出た「艶色光影」はただの光ではなく、「瑶族韓朋伝」において、母との別れに臨んで妻が箱に封じ込めた自分の美貌、あるいはその美貌が化した光と考えられる。「尉犁断簡」の「艶色」は単なる「あでやかな、美しい」という形容だけではなく、そこに妻の「美貌」の意も込められているのではないか。

「尉犁断簡」では「此光明到宋国」と、箱から飛び出た光が宋国にまで到ったことが記されるが、この記述が敦煌変文の「韓朋賦」の記述とどのように繋がるかを考えてみよう。敦煌変文「韓朋賦」では妻（貞夫）を連れて行った宋王の使者の梁伯が、宋の都に戻った時の様子を次のように記す[11]。

梁伯迅速、日日漸遠。初至宋国、九千余里。光照宮中。宋王怪之、即召群臣、並及太史、開書問卜、怪其所以。博士答曰「今日甲子、明日乙丑、諸臣聚集、王得好婦」。言語未訖、貞夫即至。面如凝脂、腰如束素、有好文理、宮人美女、無有及似。宋王見之、甚大歓喜。（すぐに貞夫を皇后に迎える）

梁伯は速度を速め、（家郷は）日に日に遠ざかった。ようやく宋国に着いたときは九千余里（を経ていた）。光が宮中を照らした。宋王は不思議に思い、すぐに群臣と太史を召して、書物を開いて占わせ、その原因を尋ねた。博士が答えた。「今日は甲子、明日は乙丑、諸臣が集まり、王は素晴らしい婦人を得るでしょう」。言い終わらないうちに、貞夫が到着した。顔はきめ細やかな油脂のよう、腰は束ねた絹のよう（に細くてしなやか）、礼儀も素晴らしく、宮中の美女たちにこれにかなう者はいなかった。宋王はそれを見て大変喜んだ。

敦煌変文「韓朋賦」では、突然宮中を照らした光は、美女が宮中に到着する前触れのように扱われて

10 原文の「喚」では意が通じないため、金氏が推定された「煥」に改める。

11 敦煌変文「韓朋賦」の引用は項楚氏『敦煌変文選注（増訂本）』（中華書局、2006 年）に拠り、通行の字体に改めた。

いるが(光の出現があまりに唐突であり、その理由を尋ねた宋王に対する博士の答え「今日甲子、明日乙丑･･･」も王の問いとかみ合っていない間(ま)に合(あ)わせの答えのように思われる)、本来は「尉犁断簡」に記されるように、箱に封じこめておいた妻の美貌が、母が戒めを破って箱を開けてしまったために「艶色光影」となって飛び出し、九千里も離れた宋国に到着した妻の元へと飛んでいったもので、せっかく美貌を隠していた妻が、元の美貌を取り戻した状態で王や集まった群臣に見(まみ)えなければならなくなる、というのが、もともとの「韓朋賦」の展開であったと想像される。

以上を踏まえて、もともとの「韓朋賦」と「瑶族韓朋伝」との両者から、韓朋譚の開箱に関する記述を取りまとめると、次のようになる。

1. 別れに臨んで妻は母に箱を渡し「絶対に開けてはならない」と母を戒める。
   ＊「瑶族韓朋伝」では自分の「顔容」を箱に蔵すことを記す。
   ＊「箱」は、「尉犁断簡」では「篋」、「瑶族韓朋伝」では「金箱」「箱」「櫃」と記される。
2. 妻が連れて行かれた後、母は箱を開けてしまう。
   ＊「瑶族韓朋伝」では、半月が経過してさびしさが募り箱を開けてしまったと状況が記される。
3. 開かれた箱に閉じ込められていた妻の美しい容貌が放出され離れた妻のもとに戻り、妻は本来の美しい容貌で宋王に見(まみ)えることになる（その結果二度と家に帰れず母との再会は叶わなくなる)。
   ＊「尉犁断簡」では箱に隠されていた妻の容貌を「艶色光影」で表現し、その光が妻の元へと飛んでいったと記し、「瑶族韓朋伝」では箱を開けた際の顔容の放出の記述はなく、船で川を渡っていた妻が水に映った自分の美貌を見て、母が箱を開けたことを知ったと記す。

２．古代浦島説話に見える開箱の記述と「尉犁断簡」「瑶族韓朋伝」の開箱の記述との比較

本章では、古代浦島説話を記す各資料に見える開箱の記述を確認しながら、「尉犁断簡」や「瑶族韓朋伝」に見える開箱の記述と比較し、両者を対照すればどのようなことが新たに見えてくるかを考察していく。

浦島説話を扱った古代の文献資料として、次の四つを取り上げる（『続日本後紀』所収嘉祥二年（849）「仁明天皇四十賀興福寺僧長歌」の浦島子の記述については開箱の禁忌の話自体がないのでここでは扱わない)。各資料によって男主人公、女主人公の呼称が異なるが、全体を通した呼称として、男主人公を「浦島子」、女主人公を「仙女」と呼ぶことにする。

ア『釈日本紀』所引「丹後国風土記逸文」（天平年間〈729-749〉頃成立か。原文引用は古典文庫『浦島子伝』（重松明久氏著。現代思潮社、1981 年）に拠る。ただし訓読は私に施した)。

イ『万葉集』高橋虫麻呂「詠水江浦嶋子一首」長歌（巻九・1740 番。高橋虫麻呂は生没年未詳、養老から天平の頃（717～748）に活動。引用は小学館「新編日本古典文学全集」に拠る)。

ウ「浦嶋子伝」（九世紀後半成立か。引用は『群書類従』文筆部に拠る。訓読は私に施した）

エ「続浦嶋子伝」（延喜二十年（920）成立。引用はウに同じ）

以下、2-1. 別れに臨んで仙女が浦島子に玉匣を手渡し「再会したければ絶対に箱を開くな」と戒める場面、2-2. 帰郷後、仙女の戒めに背いて浦島子が玉匣を開けてしまう場面、2-3. 玉匣が開けられた時に起こった事態、の三つに分けて上記の四資料の記述を掲げ、必要に応じて「尉犁断簡」「瑶族韓朋伝」に見える開箱の記述を取り上げて対照しながら私見を述べていきたい。

2-1. 別れに臨んで仙女が浦島子に玉匣を手渡し「再会したければ絶対に箱を開くな」と戒める場面

ア「丹後国風土記逸文」（仙女＝女娘、浦島子＝嶼子）

女娘取玉匣、授嶼子謂曰、君終不遺賎妾、有眷尋者、堅握匣、慎莫開見。即相分乗船、仍教令眠目、忽到本土筒川郷。

女娘玉匣を取り、嶼子に授けて謂はく「君終に賎妾を遺れず、眷尋すること有らば、堅く匣を握り、慎みて開き見ること莫れ」と曰ふ。即ち相分かれて船に乗り、仍りて教へて目を眠らしむ。忽ち本土の筒川の郷に到る。

イ「詠水江浦嶋子」長歌（仙女＝娘子、妹）

妹之答久　常世辺　復変来而　如今　将相跡奈良婆 此篋　開勿勤常　曽己良久尓　堅目師事乎

妹が言へらく　「常世辺に　また帰り来て　今のごと　逢はむとならば この櫛笥　開くなゆめ」と　そこらくに　堅めしことを

ウ「浦嶋子伝」（仙女＝神女　浦島子＝嶋子）

（浦島子が暫く旧郷に帰ってまた仙室に戻って来たいと願う）神女宜然哉。与送玉匣、裹以五綵、緘以万端之金玉。誡嶋子曰、若欲見再逢之期、莫開玉匣之緘。言了約成、分手辞去。嶋子乗船、如眠自帰去、忽以至故郷澄江浦。

神女宜しく然るべしとて、玉匣を与へ送り、裹むに五綵を以てし、緘ぶに万端の金玉を以てす。嶋子を誡めて曰く、「若し再逢の期を見んと欲すれば、玉匣の緘を開く莫れ」と。言了りて約成り、手を分かちて辞去す。嶋子船に乗り、眠るが如くして自ら帰去し、忽ち以て故郷の澄江の浦に至る。

エ「続浦嶋子伝」（仙女＝神女　浦島子＝嶋子）

神女送詞於嶋子而告言、若還故郷、莫好青色。勿損真性。五声八音損聴之声也。鮮藻艶彩傷命之色也。清醪芳醴乱性之毒也。紅花素質伐命之鋒也。嶋子若守此言、永持誡者、終万歳之契、遂再会之志。亦以繡衣被嶋子、而送玉匣。裹以五綵之錦繡、緘以万端之金玉。而誡嶋子云、若欲見再逢之期、莫開玉匣之緘。言畢約成、而分手辞去。各成決別之詞云（略）嶋子乗舟、自帰去、忽到故郷澄江浦。

神女詞を嶋子に送り告げて言く、「若し故郷に還らば、青色を好む莫れ。真性を損なふ勿れ。五声八音は聴くを損なふ声なり。鮮藻艶彩は命を傷つくる色なり。清醪芳醴は性を乱す毒なり。紅花素質は命を伐る鋒なり。嶋子若し此の言を守り、永く誡めを持たば、万歳の契りを終へ、再会の志を遂げむ」と。亦た繡衣を以て嶋子に被せ、玉匣を送る。裹むに五綵の錦繡を以てし、緘ぶに万端の金玉を以てす。嶋子を誡めて云く、「若し再逢の期を見んと欲すれば、玉匣の緘を開く莫れ」と。言畢りて約成り、手を分かちて辞去す。各決別の詞を成して云く（略）嶋子舟に乗り、自ら帰去し、忽ち故郷の澄江の浦に到る。

この場面に対応する韓朋譚においては、1-3 の a で見たように、「尉犁断簡」では前部を欠くが「□□□篋看、若其不開、新婦有帰」と、「もし箱を開けなければ私は帰ってくる（＝再会が叶う）」と告げるのに対し、「瑶族韓朋伝」は「顔容蔵在金箱里。我娘千万莫開箱」と母に「絶対に開けてはいけない」と戒めるだけで、それが何故なのかは示されていない。後に開箱されてしまってから、その理由が明らかになるという展開である。

一方、浦島説話においては、破線で示したように各資料すべてに「もしあなたが私に再会したいと思うならば」という開箱を戒める理由が示されている。それが一番明確に示されているのがイの虫麻呂の長歌で、「常世辺に　また帰り来て　今のごと　逢はむとならば」と仙女の住む常世に帰ってきての再会

をはっきりと表出している[12]。ア「丹後国風土記逸文」も「君終(つひ)に賤妾を遺(わす)れず、眷尋すること有らば」と、「再会」に当たる語句は記されていないものの、「眷尋」の語から浦島子が仙女の住む場所を再び尋ね、そこで再会することを想定していると思われる。ウ「浦嶋子伝」とエ「続浦嶋子伝」では共に「若し再逢の期を見んと欲すれば」と記され、アやイのように仙界の仙女の元を再び訪れることには触れず、単に「再会を望むならば」という形で簡素化されて語られていることがわかる。

女主人公が相手に渡す箱については、「尉犁断簡」は「篋」、「瑶族韓朋伝」は「金箱」と記す。浦島説話においてはア・ウ・エの漢文系資料がすべて「玉匣」、イの虫麻呂長歌が「尉犁断簡」と同様に「篋」(2-2では「玉篋」、「筥」とも記される）と記している。ア・ウ・エの「玉匣」は「玉飾的匣子。亦指精美的匣」(『漢語大詞典』語釈)、イの「玉篋」も「玉飾的小箱。亦用作小箱的美称」(同前）と「玉(ぎょく)で飾られた箱」もしくは「美しい箱」を言う漢語で、共に六朝以前から用いられている。またイの長歌では「篋」「玉篋」を「櫛笥(くしげ)」「玉櫛笥(たまくしげ)」と訓(よ)むが、この「玉櫛笥」については、注 12 の錦織氏論文の「三、〝旅〟と「玉櫛笥」」に注意すべき指摘がある。錦織氏は、

> 妻の娘子は、夫の浦島子になぜ「この櫛笥」を渡しておく必要があったのであろうか。このように考えるとき、思い至るのは、現実の古代の妻である。いま浦島子は、妻がいる「常世」の「海神の神の宮」を離れていこうとしている。妻の娘子は彼を夫として見送る側にいるわけである。

と述べた後に、いくつもの万葉歌の例を挙げ、当時の妻たちが旅立つ夫に「形見の衣」を着せてその衣の紐を結ぶという習俗があったこと、その習俗は妻の魂を衣や紐の結び目にこめる意味を持っていたことを述べ、

> こうした古代の習俗と発想に気づけば、妻の娘子が、夫に再び、「常世」の「海神の神の宮」に帰ってもらうために、「玉櫛笥」を渡さなければならなかった理由がよくわかるように思われる。妻の娘子が渡した「この櫛笥」には、娘子の魂がこめてあったのではなかろうか。妻の娘子は、一般の妻がわが夫に「形見の衣」を着せ、紐を結ぶように、自らの魂を「玉櫛笥」の中にこめて浦島子に渡したのではあるまいか。

と、娘子が夫に「玉櫛笥」を渡した理由と「玉櫛笥」の働きについて推測する。さらに錦織氏はここで「形見の衣」や紐の結び目ではなく、「玉櫛笥」が選ばれた理由について、浅見徹氏『玉手箱と打出の小槌』(和泉書院、改稿版 2006 年刊）の「櫛笥は本来女性の持ち物であり、当時櫛笥には所有者以外の者には開けられないという前提があった」という指摘や、『播磨国風土記』賀古郡の、別嬢(わきいらつめ)を墓に葬る時、屍を失い埋葬できなかったので彼女の「匣(くしげ)と褶(ひれ)」とを遺体の代わりに埋葬したという記事を踏まえ、

> 以上の考察を通して、古代において、櫛笥が女性のもっとも大切な私物の一つであったこと、所有する女性にしか開けることができなかったこと（女性の最も大切なものを収めうる箱であったこと）が少なくとも確かめられる。とすると、娘子がわが魂をこめるのに、「玉櫛笥」の中を選んだことは、彼女の賢明な判断と夫に対する深い愛情によっていることがわかる。

と論じられた。

---

12 仙女が「常世」への帰還を明確に表出することについては、せっかく常世での恵まれた暮らしを手に入れた浦島子が、人間界の自らの「家」へ帰ることを強く希望し、後の玉匣を開ける場面においても、「(家は失われているが) この箱を　開きて見てば　もとのごと　家はあらむと」と、自らの「家」に戻ることにこだわって戒めを破り箱を開けてしまうという、他の資料にはない長歌独自の記述と呼応しており、常世の「家」で夫（＝浦島子）との幸せな生活を望む妻（＝仙女）と、妻の側に立たずに人間界の自らの「家」にこだわる夫との対比を描こうとする作者高橋虫麻呂独自の構想があることを錦織浩文氏が指摘している（「高橋虫麻呂の浦島伝説歌の構図」。『萬葉』第 138 号、1991 年 3 月初出。後に同氏『高橋虫麻呂研究』〈おうふう、2011 年〉に「浦島伝説歌の構図」として収録)。

以上の虫麻呂長歌の「玉櫛笥」に関する錦織氏の考察は、韓朋譚において妻が母に渡した「篋」「金箱」に関しても、おそらく有効に機能すると思われる。韓朋譚では、旅立つ妻が家に残る母に箱を渡して「決して開けてはならない」と戒めており、箱を渡す者が旅立ち、箱を渡される者が家に残る点で、浦島説話とは立場が逆転した構図になってはいるが、韓朋譚では渡された箱には渡した女性の「顔容」が収められていることがはっきりと示されていた。つまり韓朋譚のこの記述から、渡された箱に収められているものは、持ち主の女性の存在そのもの（この場合は顔容）であったと見ることができるのである

さらに「瑶族韓朋伝」の「顔容を金箱にこめる」という記述と関わって「具体的には鏡に容貌を映してその鏡を金箱に収めるという行動を思い浮かべているのではないか」と推測して、「金箱」が鏡をはじめとする女性の化粧道具を入れる大切な箱であることを示すものではないかと述べたが、これも前述の錦織氏の古代の「櫛笥」に関する「女性の最も大切な私物で、所有する女性にしか開けることができなかった」という考察と関係してこよう（なお「玉匣」が鏡箱に用いられた例については稿末〔補記〕参照）。

このように、浦島説話と韓朋譚の開箱の記述を並べてみることで、双方の見えていなかった部分、あいまいであった部分が少しずつはっきりしてくると思われる。以下、このような視点で両者の比較を続けていきたい。

2-2. 帰郷後、仙女の戒めに背いて浦島子が玉匣を開けてしまう場面

ア「丹後国風土記逸文」

忽到本土筒川郷。即瞻眺村邑、人物遷易、更無所由（略･･･村人に家人について尋ね、自分が郷里を出て三百年も経つことを知る）即銜棄心、雖廻郷里、不会一親、既逕旬日。乃撫玉匣、而感思神女。於是嶼子、忘前日期、忽開玉匣。

忽ち本土の筒川の郷に到る。即ち村邑を瞻眺るに、人・物遷り易り、更に由る所無し（略）即ち棄心を銜み、郷里を廻ると雖も、一の親しきものにも会はず、既に旬日を逕。乃ち玉匣を撫し、神女を感思ふ。是に於て嶼子、前日の期を忘れ、忽ち玉匣を開く。

イ「詠水江浦嶋子」長歌

墨吉尓　還来而　家見跡　宅毛見金手　里見跡　里毛見金手　恠常　所許尓念久　従家出而　三歳之間尓　垣毛無　家滅目八跡　此筥乎　開而見手歯　如本　家者将有登　玉篋　小披尓

住吉に　帰り来りて 家見れど　家も見かねて　里見れど　里も見かねて　あやしみと そこに思はく　家ゆ出でて　三年の間に　垣もなく　家失せめやと　この箱を　開きて見てば　もとのごと　家はあらむと　玉櫛笥　少し開くに

ウ「浦嶋子伝」

忽以至故郷澄江浦、尋不値七世之孫、求只茂万歳之松。嶋子齢于二八歳許也。至不堪、披玉匣見底。

忽ち以て故郷の澄江の浦に至り、尋ぬるに七世の孫にも値はず、求むるに只だ万歳の松のみ茂れり。嶋子齢は二八歳許なり。堪へざるに至り、玉匣を披きて底を見る。

エ「続浦嶋子伝」

忽到故郷澄江浦。（略･･･故郷の変貌、村人に尋ねて数百年の歳が経過したことを知る）於是嶋子知、仙洞之裏、遊覧之間、時代遥謝、人事沿革。而悲歎旧郷之遷変、想像仙遊之未央。恋慕之情、胸臆似舂。悲哀之志、心府如割。不堪悲恋、而忽開玉匣。

忽ち故郷の澄江の浦に到る。（略）是に於て嶋子、仙洞の裏に遊覧の間に、時代遥かに謝りて人事沿革

するを知る。而して旧郷の遷変を悲歎し、仙遊の未だ央(なかば)ならざるを想像(おもひや)る。恋慕の情は胸臆を春(つ)くに似たり。悲哀の志は心府を割(さ)くが如し。悲恋に堪(た)へずして忽(たちま)ち玉匣を開く。

ここでは、各資料の破線部の浦島子が仙女の戒めを破って箱を開けてしまう理由や状況について注目してみたい。まず、イ「詠水江浦嶋子」長歌では、帰郷して自分の家がなくなっていたことに衝撃を受けた浦島子が、「箱を開ければ家が元通りに現れるのでは」と思って箱を開けてしまうという、他の資料に見えない理由と経緯が語られているが、これは注 12 に引いた錦織論文の指摘の通り、常世での夫との変わらぬ生活を望む仙女と、人間界の自分の「家」への帰還にこだわりその生活を捨ててしまう浦島子とを対比して長歌を構想した作者虫麻呂の創意にもとづくものであろう。

これに対して、ア「丹後国風土記逸文」では、浦島子が郷里に帰ると全てが移り変わっており（人物遷易)、放心状態（銜棄心）で郷里を尋ね回っても一人の知人にも会えず十日（旬日）がたってしまって極限のさびしさから、手に持った玉匣を撫でているうちに神女に思いを馳せ、ついに玉匣を開けてしまうという経緯が記される。浦島子にとって玉匣は開けてはならない戒めの対象であったが、同時に神女が日頃から大切にしていた私物であり（2-1 参照)、彼女を偲ぶ唯一のよすがでもあった。それが悲劇を引き起こす要因となっている。

またウ「浦島子伝」では血縁者が誰一人残っていないこと、家宅もすっかり失われてしまったことを「尋不値七世之孫、求只茂万歳之松」の簡潔な対句で示した後に、浦島子の年齢が「二八許」であることを記す。これは他の資料には見えない記述であるが、おそらく彼がまだ若くて思慮や忍耐力に欠けることを示そうとしたのではないか。そのことで「堪へざるに至り」箱を開けてしまったと記すが、他の資料とは異なり、何に堪えられなかったかが明確には記されていない。ただしこの文章の流れに従えば、血縁者もなく家も失われてしまったことだけが記され、仙女への恋慕は記されていないので、イと同様に故郷を喪失した驚きや寂しさに堪えられず箱を開けてしまった、と解してよいのではないか。

エ「続浦嶋子伝」ではウと異なり、「悲恋に堪えられなかった」と、何に堪えられなかったか対象を明記するが、その「悲恋」とは前置される「悲歎旧郷之遷変（＝故郷の喪失を悲しむ)、想像仙遊之未央（＝仙女との失われた暮らしを思いやる)。恋慕之情（＝仙女への恋慕)・・・。悲哀之志（＝故郷喪失の悲哀)・・・」の章句から、故郷を失った「悲哀」と仙界に残してきた仙女への「恋慕」の二つの感情であったと見て取れる。時代的に最も後れるエは、玉匣開箱の理由として、先行するアの仙女への恋慕とイ・ウの故郷（家宅）の喪失の悲哀の両方を取り込んでいる。

一方、韓朋譚に目を向けると、「尉犁断簡」では「朋母新婦去後、乃開篋看」と、母が戒めを破り箱を開けた理由や状況についてはまったく記されておらず、浦島説話との比較に資する記述は見えない。一方の「瑶族韓朋伝」では、「三娘去得三五日。淒々想婦又開箱」と、妻が旅立って半月が経ち、さびしくなってきた母が妻を想って箱を開けたと記されている。ここでは箱を開けた理由として「半月」という時を経て「さびしさから妻（嫁）への思慕が募った」ことがはっきりと示されているが、浦島説話においても、アの「丹後国風土記逸文」には「既逕旬日。乃撫玉匣、而感思神女」と、「旬日」[13]という時の経過を経て「神女」への思慕が募るという同様の記述が見える。「瑶族韓朋伝」には、アの「撫玉匣」のように箱が持ち主の女性を思い出させるという記述は見えないが、「千万莫開箱」と強く戒められていたにもかかわらず、さびしさが募った母が金箱を開けてしまった理由は、やはりアと同じように金箱が妻（嫁）の大切な私物で、彼女を偲ぶ唯一のよすがであったからだと考えてよいのではないだろうか。

13 「旬月」とするテキストも存在する。

2-3 玉匣が開けられた時に起こった事態（傍線部は放出された主体、破線部は放出された主体の状況）

ア「丹後国風土記逸文」

即未瞻之間、芳蘭之体、率于風雲、翩飛蒼天。

即ち未だ瞻（み）ざる間、芳蘭の体、風雲に率（したが）ひて、蒼天に翩（ひるがへ）り飛ぶ。

イ「詠水江浦嶋子」長歌

白雲之　自箱出而　常世辺　棚引去者

白雲の　箱より出でて　常世辺（とこよへ）に　たなびきぬれば

ウ「浦嶋子伝」

紫煙昇天無其賜。

紫煙天に昇りて其の賜（たまひもの）無し。

エ「続浦嶋子伝」

于時紫雲出於玉匣、指蓬山飛去也。

時に紫雲玉匣より出でて、蓬山を指して飛び去りき。

韓朋譚の開箱の記述においては、「尉犁断簡」では「艶色光影、忽然煥出、飛及貞夫。此光明到宋国」と「艶色光影」が輝き放たれて妻の元へ飛んでいったと記し、「瑶族韓朋伝」では「三娘便知娘開櫃、放出容顔走随娘」と、母が箱を開けた時の場面はないものの、箱が開けられると箱の中に閉じ込められていた妻の容顔が放出され妻の所へと戻ってきたことが記される。「尉犁断簡」の「艶色光影」が光であると同時に箱に込められていた妻の美貌を意味することは 1-3 で既に述べたところである。

このことを勘案すると、直前の浦島説話の各記事の傍線部において、玉匣を開けた時に放出されたものを、イが「白雲」、ウ・エが「紫煙」「紫雲」とするのに対して、アが「芳蘭之体」とすることが、韓朋譚の開箱の記述との関係で特に注目される。この「芳蘭之体」については、従来から若さを保っていた浦島子の身体を指すのか（御伽草子『浦島太郎』の「そもそもこの浦島が年を、亀が計らひとして箱の中にたたみ入れにけり」という記述に拠ったもの）、仙女の身体を指すのか、両説が並立していたが、浅見徹氏は 2-1 所引の著書の第二章第五節「玉手箱の役割」において、中村宗彦氏の先行研究[14]や、日本の古代文献や中国側の資料における「芳」「蘭」の用いられ方、破線部の「率于風雲」の「風雲」と仙界との関係などを総合的に詳しく考察された上で、

> この風土記の文章を、浦島の寿命ないし霊力というようなものであるという解は、この文面からは成り立たず、もし何ものかが飛び去ったと解するのなら、その何ものかは乙姫のものであったと考えるべきであろう。　（傍線は筆者による）

と述べ、さらに「櫛笥」の属性などにも言及されて、玉手箱の中に入っていたのは乙姫自身であり、「丹後国風土記逸文」においては彼女が変身していた亀であったと論じられた。

今、「尉犁断簡」や「瑶族韓朋伝」に、箱を渡す女性が自らの容顔を箱に封じ込めて開けないよう戒め、戒めが破られ箱が開けられると閉じ込められていた彼女の容顔が放出される、という記述が存在することを重ね合わせると、浅見氏の「箱の中に入っていたのは乙姫（仙女）自身であった」という見解は、外部資料によってその蓋然性がさらに高められたといえよう。

またイの「白雲」については、先に引いた錦織氏の論に諸説が整理されており（同氏論文注（7））、神界（常世）の霊気・霊力とする説、娘子の魂と捉える説、浦島子自身の魂とする説があるとされる（錦

14 「浦島子古伝覚書」（『大谷女子大国文』3 号、1973 年 3 月）

織氏は浦島子を守る娘子の魂と捉える)。またウ・エには「紫煙」「紫雲」ともあり、アにも仙女の「芳蘭之体」が「率于風雲、翩飛蒼天」と「雲」に乗って空に飛び去っていったと記されている。これらの「雲」については、先行研究では仙界の景物として捉えられているが(前引浅見氏著書、錦織氏論文注(7)等)、筆者はこれらの「雲」を考える際には、中国の孝子董永譚(敦煌変文「董永変文」、明代話本「董永遇仙伝」)に見える、董永と天女との別れの場面が大いに参考になると考えている。

貧しい孝子董永は父親の葬儀を行うための金がないので、自分の身を長者に売り、その金で葬儀を執り行う。董永の孝心に感じた天帝は、天の織女(=天女)を地上に派遣する。董永の妻となった織女は驚異的な早さで大量のすばらしい織物を織って長者に納め、短期間で董永の借金を返済する。役目を終えた織女は董永に別れを告げて天に帰っていく。

その織女の帰天の場面を前掲両資料は次のように描く。

「董永変文」(引用は注11前出『敦煌変文選注(増訂本)』に拠る)

却到来時相逢処、辞君却至本天堂。娘子便即乗雲去。

(織女が)地上にやって来た時に二人が出会った所まで来ると、(織女は言った)「では、あなたにお別れしてもとの天界に帰ります」。そして娘子(織女)は雲に乗って行ってしまった。

「董永遇仙伝」(『清平堂話本』〈続修四庫全書本〉に拠る)

董永当時拝謝長者、領妻出門。行至旧日槐陰樹下暫歇。仙女道、当初我与你在此槐樹結親、如今又三月矣。不覚両泪交流。董永道、賢妻何故如此。仙女道(略、自らが天の織女であることを明かし董永のもとに来たわけを話す)道罷、足生祥雲、冉冉而起。董永欲留無計、仰天大哭。

董永はそこで長者にお礼を申し上げ、妻を伴い(長者の)家を出た。先日(二人が出会った)槐の木の下までやってきてしばらく休んだ。すると仙女(織女)が言った。「最初、私はあなたとこの槐の下で夫婦の契りを結びました。今、三か月がたちました」。そして思わず両目から涙を流した。董永は言った。「妻よ、一体どうしたのだ」。仙女は言った。(略)言い終わると足元から祥雲が生じ、ゆらゆらと昇っていく。董永は留めるすべもなく、天を仰いで大声で泣くばかりであった。

傍線部によると織女が夫董永と別れて昇天する際に、「董永変文」では雲に乗って去って行ったと記し、「董永遇仙伝」でも、足元から「祥雲」が生じ、それに乗って昇天したように読める。この董永譚の織女が雲に乗って昇天する場面は唐代以降かなり一般化していたようで、二十四孝系の絵入本(『新刊全相二十四孝詩選』、御伽草子『二十四孝』等)の「董永」には、雲に乗って昇天する織女とそれを見上げる董永の図が載せられている(本稿末尾に掲載)。

前掲の浅見氏著書では「丹後国風土記逸文」の「率于風雲」の「風雲」が仙界のものであることを「風土記逸文」の内部から考察されていたが、古代浦島説話の各資料において開箱とともに出現した雲は、この董永譚の天女昇天の場面に描かれた雲と同質のもので、仙女が人間界を離れ仙界へ向かうときの乗り物(ア)、あるいは仙女自身が化したもの(イ・ウ・エ)と見なしてよいのではないだろうか。ウ・エにおいてその雲を「白雲」ではなく「紫煙」「紫雲」と記すのは両資料が神仙思想の強い影響の下に記されたものであることに由来するのであろうが、あるいは「董永遇仙伝」の「祥雲」とも関係するのかもしれない(「紫煙」「紫雲」は瑞祥の雲気をいう)。

またイ・エの波線部、白雲が常世辺にたなびく(イ)、紫雲が蓬山を指して飛び去る(エ)も、仙女の乗り物、あるいは仙女が化した雲が仙界へと帰っていく様を述べたものと解することができ、アの記述の後に載せられた浦島子と仙女との歌の贈答、

于斯、拭涙歌曰（斯(ここ)に、（浦島子）涙を拭(のご)ひて歌ひて曰く）、
　常世辺(とこよへ)に雲たちわたる水の江の浦島の子が言(こと)持ちわたる
神女遥飛芳音歌曰（神女遥かに芳音を飛ばして歌ひて曰く）、
　大和辺(やまとへ)に風吹きあげて雲放(はな)れ退(そ)き居(を)りともよ吾(あ)を忘らすな

も、本稿末尾に掲げた二十四孝の董永図の構図のように、雲に乗って仙界に帰っていく仙女に向かって呼びかける浦島子と、帰っていく雲の上から「遥かに芳音を飛ばして」浦島子に応(こた)える仙女との最後の会話と見ることができよう。仙女の乗った雲が去って行くのを地上から傍観して「常世辺(とこよへ)に雲たちわたる･･･」と詠むしかない浦島子に対して、仙女も「大和辺(やまとへ)に風吹き上げて雲放(はな)れ･･･」と風に吹き上げられ雲に乗って去って行くしかない自らの状況を詠んでいる。浦島子歌の「言(こと)持ちわたる」は、雲が媒介者として「言を持つ」のではなく、「雲に乗った仙女が浦島子（＝私）の最後の言葉となったこの歌を持って仙界へ帰っていく」の意と解するのがよいと考える。

以上、古代浦島説話を記す四つの資料の開箱の記述について、「尉犁断簡」「瑶族韓朋伝」の開箱の記述を照合して考え合わせるとどのようなことが見えてくるか、開箱の場面ごとに考察してみた。韓朋譚の開箱の記述を参照することで、先行研究の推論をさらに裏付けることができ、さらに個々の資料の記述について踏み込んで考察・解釈することができたと考える。

次章では、以上の考察の結果をまとめたうえで、そこからどのような見通しが得られるかを述べて本稿を閉じることにしたい。

３．本稿の考察のまとめとそこから得られる見通し―結びに代えて―

それでは前章の内容の要点を述べてみたい（以下、「尉犁断簡」「瑶族韓朋伝」の両書における開箱の記述をまとめて「韓朋開箱譚」と称する）。

１.「韓朋開箱譚」において女主人公が渡した箱に込めたものが自らの容貌であったことから、古代浦島説話において仙女が浦島子に渡した玉手箱（玉篋、玉匣）に収められていたのは仙女自身、あるいは仙女の魂であったとする見方の蓋然性はかなり高くなる。

２.「韓朋開箱譚」において、箱を開けた時に箱に込められていた女主人公の容貌、あるいはそれが化した光が飛び出して女主人公のもとへ戻って行ったことから、古代浦島説話において玉手箱を開けた時に飛び出た「芳蘭之体」や「白雲」「紫煙・紫雲」も、仙女自身の身体（「芳蘭之体」）、もしくは仙女が化したもの（「白雲・紫煙・紫雲」）であり、それが仙女の居る仙界へ戻って行ったという見方が蓋然性を持ってくる。またこの場面に「白雲」や「紫煙・紫雲」が登場することについては、中国の董永譚の織女（天女）と董永（人間）との別れの場面の、天女が雲に乗って去って行く描写を参考にすると理解が容易になる。

以上の１・２から古代浦島説話を記載する四つの資料の位置づけを考えてみると、時代的にも古いと思われる「丹後国風土記逸文」の開箱の記述は、箱から放出されたものを「芳蘭之体」と明確に記す点で、「白雲」や「紫煙･紫雲」とする他の三資料よりも、「韓朋開箱譚」との距離が近いと言えよう。小さな箱の中に仙女の「身体」が入っているという、合理的に考えれば有り得ない状況を解決しようとして、他の三資料では「雲」が放出される形に変化させたと考えられるのではないか。

また玉手箱を開けた後の浦島子の状態を見ても、仙女と別れて悲しみに沈むものの身体的には特に変

化を来さない「丹後国風土記逸文」に対して、「浦島子長歌」と「浦嶋子伝」では一気に白髪の老人と化して死んでしまったと記し、「続浦嶋子伝」では仙道修行にいそしみ「地仙」と呼ばれたと記す。「はじめに」で述べた浦島説話と深い関係を有する劉阮天台説話においても、仙境から帰還した二人は七世の孫に逢うなど厖大な時間の経過を身をもって体験するが、身体的な変化を来したことは全く記されない。その点でも「丹後国風土記逸文」は中国に行われていた類話との距離が近く、それに対して他の三資料は玉手箱からの「雲」の放出を仙女の霊力の消失と捉え、「浦島子長歌」と「浦嶋子伝」は仙女の霊力を失ったことで浦島子の身体が時間の経過に堪えられずに失われたとし、最も濃厚な神仙思想の影響下にある「続浦嶋子伝」では、浦島子は仙道修行に励むことで「地仙」となり、仙女の霊力の消失による身体の損壊を免れるのである。このように中国での類話と比較することで、「丹後国風土記逸文」の開箱の記述が他の三資料に比して古態を有している点を明らかにできたのではあるまいか。

最後に、「韓朋開箱譚」と浦嶋子説話における開箱の記述の物語上の位置づけの違いと、そこから見えてくる韓朋譚における「韓朋開箱譚」の後発性について述べてみたい。浦嶋子説話においては、箱を渡された者が「開けるな」という禁忌を破ったために箱を渡した者（女性）と永遠に会えなくなるというモチーフ（以下「開箱の禁忌のモチーフ」と称する）が、そのまま男主人公（浦島子）と女主人公（仙女）との別離の悲劇の基本構造（枠組み）を形成している。それに対して「韓朋開箱譚」では、箱を渡された母が禁忌を破った結果、妻が箱に閉じ込めておいた美貌が妻の元に戻ってしまい、妻はそのまま宋王の后にされて家に戻れず母と二度と会えなくなる、と話が展開する。物語の展開としては、閉じ込めておいた妻の美貌が元に戻ってしまい、「妻が宋王の后にされてしまう」点が重要なのであって、そこから宋王の后にされた女主人公（妻）と宋王の下で仕官していた男主人公（韓朋）とが引き裂かれていく悲劇の物語がようやく始まるのだが、ここで「開箱の禁忌のモチーフ」が作用しているのは妻と韓朋の母とに対してであって、妻と母との別離は確かに悲劇ではあるが、浦島説話のような、男女主人公の悲劇の〈本筋〉ではなく、物語の展開上はあくまでも〈添え物〉としての悲劇に過ぎない。

1-2 に述べたように、「韓朋開箱譚」は、現在韓朋譚として最も知られている敦煌変文の「韓朋賦」には脱落しているものの、もともとの「韓朋賦」には存在していたと推測されているが、この話柄が無くとも韓朋と妻との悲劇の物語の展開には大きな支障は来さないのであり、それ故、現存の敦煌変文「韓朋賦」では物語の展開を単純化するために削られてしまったと推測される（痕跡は残るが）。こうして見てくると、「韓朋開箱譚」を有していたもともとの「韓朋賦」よりもさらに前の段階の韓朋譚においては「開箱の禁忌のモチーフ」は存在しておらず、ある段階で、浦島説話のような、このモチーフを基本構造としていた別の物語から、ストーリーを複雑化しておもしろくするために組み込まれた可能性も否定できないと考える[15]。

以上、金文京氏の「尉犁断簡」と「瑶族韓朋伝」についての報告に触発され、この両資料と日本の古代浦島説話を記した各資料とを比較して縷々私見を述べてきた。古代浦島説話については厖大な先行研究があり、本来なら、逐一それらを踏まえて論を進めなければならないのかもしれないが、煩雑を避け行論上特に必要なものに限って取り上げた次第である。しかしなお行論のうえで重要な先行研究を見落と

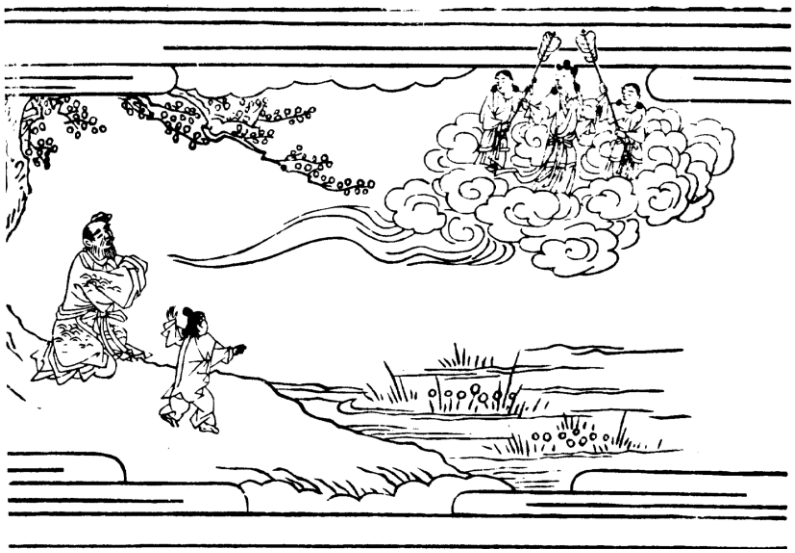
15 女主人公の神仙性にも留意する必要がある。浦島説話では女主人公は仙女であるから自らの身体を小さな箱に閉じ込めることは当然可能であろうが、韓朋譚の女主人公は卓越した思考力や行動力を有するものの、それはあくまでも「人間」としての能力であり、韓朋譚においては、「韓朋開箱譚」以外で彼女がこのような超人的な能力を発揮する場面は他に見受けられない。そもそもこうした超人的な能力があるのなら宋王の横恋慕も容易に退けることができるのではないか。「韓朋開箱譚」がある時点で韓朋譚に組み込まれた話柄ではないかと推測するもう一つの所以である。

しているかもしれないことを危惧している。諸賢のご教示・ご批判を仰ぎたい。

〔補記〕ア・ウ・エの「玉匣」が鏡を収める箱に用いられた例は、中国では梁・何遜の「詠照鏡」(『玉台新詠』巻五）に「玉匣開鑑形、宝台臨浄飾（玉匣鑑形を開き、宝台浄飾に臨(のぞ)む)」、北周・庾信の「鏡」（『庾子山集』巻四）に「玉匣聊開鏡、軽灰暫拭塵（玉匣聊(いささ)か鏡を開き、軽灰暫(しばら)く塵(ちり)を拭(ぬぐ)ふ)」と六朝後期の詩人から例が見え、日本でも『経国集』巻十四の小野春卿(はるきみ)「奉試賦得照胆鏡（奉試、賦して照胆鏡を得たり)」に「玉匣池(いけ)深朝気徹、金台氷冷夜陰申（玉匣池深くして朝気徹(とほ)る、金台氷冷(こほりひや)やかにして夜陰申(の)ぶ)」と平安時代初期から例が見える（「池」は、ここでは玉匣に収められた鏡の喩え)。

〈参考〉二十四孝の「董永」図

『新刊全相二十四孝詩選』董永挿絵
（国立国会図書館デジタルコレクション公開の禿氏祐祥氏『二十四孝詩選』〈全国書房、1946 年〉の影印に拠る）



渋川版御伽草子『二十四孝』董永挿絵
（『御伽草子』〈三弥井書店、1971 年〉の影印に拠る）
＊子どもは董永と織女との間に生まれた董仲と見られる。